

情報政策の変遷及び今後の展望と SEC に対する期待



経済産業省 商務情報政策局 情報処理振興課長
野口 聡

SEC journal の 10 周年記念号に寄せて、経済産業省の情報政策の 10 年の変遷と 2020 年に向けた今後の展望を簡単に述べてみたい。

我が国の情報政策は 2000 年を境に大きく転換した。1998～2001 年頃にかけて米国においてインターネットの普及による IT 革命が進展する中、我が国においても IT の活用による社会の革新を図るべく 2000 年に IT 基本法を制定し、2001 年には IT 戦略本部設置や e-Japan 戦略の策定を通じて、まずは IT 基盤整備に取り組んだ。

今から 10 年前に当たる 2004 年は、基盤整備に目途をつけて次の段階の「IT 利活用」を推進するための「e-Japan 戦略Ⅱ」を策定し実行していた時期である。

当時の重点分野は医療、食、生活などの「先導的 7 分野」について IT 利活用を通じた生産性向上や高付加価値化を目指すと共に、大規模な IT 投資促進税制により我が国企業の IT 利用を促進した。

経済産業省では、「e-Japan 戦略Ⅱ」に基づき、ソフトウェア・エンジニアリング手法を適用したソフトウェア開発、高度 IT 人材の実践的育成、ハード・ソフト融合領域における組込みソフトウェア開発力の更なる強化を情報政策の重点と位置付けて、我が国のソフトウェア・エンジニアリングの拠点として、2004 年 10 月 SEC (ソフトウェア・エンジニアリング・センター (現ソフトウェア高信頼化センター)) を設立すると共に、組込みソフトウェア開発力強化のため、組込みソフトウェア技術者のスキル標準である「組込みスキル標準 (ETSS)」を策定し、2005 年 5 月に公表した。

当時、高い国際競争力を有していた家電製品などにおいて高度な機能を実装する組込みソフトウェアの大規模化、複雑化が急速に進む中で、社内リソースの不足などからソフトウェア開発の外注比率が上昇すると共に、より短期間での開発要求が増加した。こうした厳しい開発環境のもとで、ソフトウェア品質の管理は困難さを増し、携帯電話やデジタルカメラなどでソフトウェアの不具合による販売の中止やリコール、事後的なソフトウェア修正対応などが発生した。その根底にはソフトウェアの品質・生産性の低下などの課題があると指摘され、我が国のソフトウェアの開発力強化の必要性が急速に高まったことが SEC 設立の背景と考えられる。

ちなみに、海外では当時既にソフトウェア・エンジニアリング研究が始まっており、1984 年に米国カーネギーメロン大学ソフトウェア工学研究所 (SEI) が、1996 年にドイツのフ라운ホーファ協会実験的ソフトウェア工学研究所 (IESE) が設立されていた。

その後 10 年を経て、通信速度や演算速度の劇的な向上、スマート端末の普及や製品のスマート化による IOT (Internet of Things) の顕在化、クラウド・サービスの加速化、ビッグデータ利用の拡大、セキュリティ対応の複雑化など、情報政策を取り巻く環境は革命的な変化を遂げた。

はたして、政府の情報政策はその環境変化に追いついているのだろうか。海外では、IT をビジネス戦略のコアとして活用することにより、これまでになかった革新的な製品やサービスを創出して世界市場を席巻した新たなグローバル企業も出現している中で、我が国産業の生産性向上や国際競争力強化などを実現するため、IT、とりわけソフトウェアの役割は更に重要となっており、今後の情報政策の一層の充実が必要となっている。

我々は今、IT 活用を通じて「コスト削減」ではなく「付加価値向上・売上拡大」を目指す「攻めの IT 投資」を産業界に呼びかけると共に、革新的なビジネスモデルを実現する IT ベンチャーの起業促進に重点的に取り組んでいる。2020 年に向けて、更なる情報政策の充実に取り組んでいきたい。

さて、SEC の取り組みは上述した時代の状況変化に追いついているのだろうか。これまでの取り組みの延長線上にとどまっていなかったらどうか。ソフトウェアがあらゆる産業を支える付加価値の源泉であることを十分に実証し、その成果を広く社会に対して分かりやすく発信できているのだろうか。この質問に対する答えは、きっと、この SEC journal の 10 周年記念号に載っているのではないかと期待するところである。

最後に、我が国産業がいよいよ本格的に知識サービス化する中でソフトウェアの役割は加速度的に重要性を増している。東京オリンピック・パラリンピックが開催される 2020 年に向けて、ソフトウェア・エンジニアリングやシステムズエンジニアリングに関する専門的知見を有する SEC の新たな飛躍を期待したい。